

「タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学文学部4年 富安若葉

私にとっては初めての東南アジアだった。タイという異文化は自分にとって未知であり、何を知るにも驚きがあった。このプログラムの一番の特徴は、チュラーロンコーン大学の学生と近い距離で交流できることだと思う。共同発表の班のメンバーや、京都での受け入れプログラムの際に仲良くなった生徒が中心となって、私たち日本人をチャイナタウンや現地の美味しいレストラン、ショッピングセンターに連れていってくれた。皆でトウクトゥクにも乗った。2週間の交流を通じ、私はタイという国が大好きになった。

実際に行って、渡航前のイメージと違ったことはたくさんある。渡航前、バンコクは舗装されていない道路に屋台が並んでいるイメージだった。実際はそういう地域もあったが、サイアム駅周辺の、ショッピングモールが集まった区域はネオンがきらびやかな都会だった。また私たちが交流したタイの学生はタイよりも日本や韓国、欧米の文化に関心があるようだった。ジャニーズにも詳しく、タイでもSNSが普及しており、カルチャーもグローバル化していることを非常に感じた。日本食の店も多く見かけた。

チュラーロンコーン大学文学部日本語学科の生徒たちの日本語のレベルは極めて高く、人によって差はあったが普通の日本人と話しているのと変わらないと思った。将来の夢は日本企業への就職や、日本でタイ語の教師になることだという学生もいた。日本語を頑張って勉強している学生を見て、私も頑張らなくてはという気持ちにさせられた。

タイ料理は毎日食べた。学食では、美味しく辛いタイ料理を安い価格で食べられる(30バーツ程度)。メニューはタイ文字表記で読むことができなかつたので、写真を指差して注文した。ソムタムを「マイペツ」(辛くないで)と言って注文したが、激辛だった。さらに言葉を付け足す必要性を感じた。辛さでお腹をこわすことはなかったが、食べ過ぎてお腹をこわすほど美味しい食事を楽しんだ。

印象的だったのは、プログラムで訪れたアユタヤ遺跡での首の無い銅像である。歴史的にタイは昔からビルマ(現ミャンマー)と戦争を繰り返していた。戦争の時、ビルマ軍が勝利の証にアユタヤの仏像の首を持って行ってしまったのだという。そのせいで並んでいた仏像は全て首が切られていた。また、寺院が焼かれたために所々黒くなった跡が残っていた。戦争の激しさが窺い知れ、心が痛くなった。

タイの政治に関しても授業で学んだ。プミポン国王が亡くなった後にラーマ10世が即位したが、問題の多い王様とのことだった。街のあちこちで亡きプミポン国王の肖像画が大々的に飾られていた。ショッピングモールの内外や大学前、広場など何度見かけたか分からない。国王の影響を感じた。

今回のプログラムで、チュラーロンコーン大学の日本語学科の学生、授業の講師の方々、また現地の先生には大変お世話になった。毎日朝食を用意してくださり、「アユタヤで象に乗りたい」「ニューハーフショーを見たい」という要望も叶えてくれた。大変感謝している。

今回のプログラムに参加して本当に良かったと思っている。タイの食文化に触れ、現地の学生とも交流でき、タイ語も現地で学び直して定着を図ることができた。学んだ単語は積極的に使った。様々な経験ができ、本当に充実した2週間だった。

このプログラムを通じ、改めて海外と関わる仕事に就きたいと思った。現在決まっている就職先では海外に行くことは難しいので、進路を考え直すかもしれない。海外と日本を繋ぐ仕事をしたいと思っている。もちろん、再び海外留学に行きたいという思いも膨らんだ。